

### 公民館からのお知らせ

問い合わせ 公民館 ☎35-0700/FAX31-4998(〒659-0068 業平町8-24)

#### 公民館子ども教室「バレンタイン・クッキー作りと簡単料理」

日時 2月3日(土) 午前9時45分~11時45分 午後1時15分~3時15分 会場 市民センター料理室 対象 小学生(保護者同伴可) 定員 各20人 材料費等500円 申し込み はがきまたはファクスで、教室名と の時間、住所・氏名・学年・電話(ファクス)番号を明記し上記へ。応募多数の場合は抽選し、結果をはがきで連絡。

#### 芦屋川カレッジ公開講座

##### メルボルン事件と人権 ~もしも、海外旅行で事件に巻き込まれたら~

日時 2月28日(水) 午前10時~11時30分 会場 市民センター401室 定員 先着60人 受講料 300円 内容 言葉の通じない国で事件にあつたら、どう対処したらいいのでしょうか?国際化時代の人権についてを考える講演会 講師 神戸女学院大学助教授・長尾ひろみ氏 申し込み はがきまたはファクスで、講座名・住所・氏名・学年・電話(ファクス)番号を明記し上記へ。

#### 男女共同参画センター講座

##### 言葉のスポーツ『ディベート』で表現力を身につけよう

「ディベート」は、相手の話をよく聞き、自分の思いも正確に伝えるコミュニケーションのひとつです。基礎から学んで、自己表現力アップを目指しませんか?  
日時 2月13日・20日・27日・3月6日(火)<全4回> 午前10時~正午 会場 ウィザスあしや 内容 「表現力」があるかどうかのときに役立つのか「ディベート」の広い意味、狭い意味 ミニディベート実施、「論題」作成、審査のポイント 実際の試合、審査・判定 講師 神戸松蔭女子学院大学短期大学部教授・福田洋子氏 定員 全4回参加できるかた、先着30人 一時保育 2歳以上就学前の幼児・先着8人(1人1回300円)。事前の申し込み必要 受講料 1,200円 申し込み はがき・ファクスまたはEメールで、講座名・住所・氏名・電話(ファクス)番号、一時保育の希望者は子どもの名前・生年月日を明記し、2月6日(火)までにウィザスあしや(男女共同参画センター)へ。

問い合わせ 男女共同参画センター ☎38-2023/FAX38-2175 (〒659-0092 大原町2-6) Eメール josei-ce@city.ashiya.hyogo.jp

### 土中からのメッセージ

#### 芦屋考古学再発見 25

### 高地性集落の謎に挑む(10)

#### 高地性集落研究のメッカ、会下山で討議

問い合わせ 生涯学習課 ☎31-9066

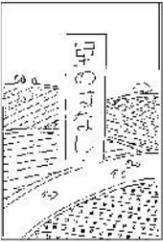
今から三十二年前の一九七四年九月、そうそうたる顔ぶれの考古学者たちが芦屋で一泊し、八時間に及ぶ討論を行った後、会下山遺跡に登りました。山口大学の小野忠義教授をチーフとする、弥生系高地性集落総合研究グループ(文部省科学研究(当時)のメンバーで、九州からは小田富士夫氏、山陰からは東森森良氏、山陽からは間壁忠彦氏、四国からは岡本健一氏、近畿からは森浩一氏、村川行弘氏、佐原眞氏、石野博信氏、都出比呂志氏、関東からは関俊彦氏などが加わっていました。当時、一番若い文化財担当職員は二十二歳でしたが、夜を徹しての議論と翌日午前中の討議をすべてテープにとり、そして内容をこと細かくメモしました。



全国から集まった考古学者たち(1974年9月)

全国から来訪した考古学の研究者は、県史跡会下山遺跡と西日本の高地性集落の年代と性格をめぐって、最新の議論が進められました。今日問題になっていることがらを先取りする形で、はつきりと記録に残されていきました。当時は、全国各地の弥生土器の年代が確定していなかったため、早急に各地の土器の年代を整理する作業が大切であること、それには互いの土地の土器をよく見比べ歩く必要があること、

それらに的確な実年代を与えることが、高地性集落の真の姿を浮き彫りにできることなどが熱く語られました。これらの記録は阪神・淡路大震災ですべて消失しましたが、今さらながら、会下山遺跡のもつ全国的価値の高さに圧倒される気迫に満ちたものでした。このたび、ルナ・ホールで開催されたフォーラムでは、その一部に関連することしかディスカッションでできませんでしたが、現在記録集の編纂が進められており、五十年という一つの節目を経た会下山遺跡の学術的価値と市民遺産としてのすばらしさが改めて世に問われることになると思います。



文・三好美佐子さん 絵・竹本 温子さん

むかし、六甲山のふもと、あしやの里に、それは、きれいな娘がおった。名をうなひと

いうた。娘は、毎日、葺が一面に茂っている原っぱの中の家で、ハタリ、ハタリと布を織っておった。そんな娘を、ひと目見たいものと、家の前を通りかかると、一日中はたおりにしているうなひをのぞき見る人が絶えなかった。

その中に、ひときわ自立派な一人の若者がいた。いつもやってきては、娘の親に、「どうか、うなひさまを、お嫁にください。」と、熱心に頼むのであった。

一人は、この土地に住む、うばらの男で、もう一人は、和泉の国からちぬの海をわたってやってくる、ちぬの男であった。この二人は、年ごろも、顔すがたも、そして気

立てもそれぞれによく、りっぱな若者であった。娘の親も、どちらの若者を選ぶか迷ってしま、い、ほとほと困り果てた。そこで、「うなひよ、どちらのかたの嫁にいくか。」「はい、ちぬの男さまに。」「そうか、ちぬの男のかたか。」「でも、うばらの男さまに。」「どうするのじゃ、おまえの体を二つに分けることはできぬのじゃ。」「そういわれても、娘も、どちらを選ぶかわからなくなっていた。」「そうしているうちに、若者ふたりは毎日のようにやってきて、その競い合いは激しくなるばかりであった。

朝、うばらの男が、六甲の山でとった美しい山鳥をおみやげに持ってくる。昼すぎには、ちぬの男が、りっぱな鯛を持ってやってきた。たまたま、二人が、娘の家で出会うようなものなら、たちまち、争いは始まり、はては、弓や刀に手がいくというありさまに、まわりは、はらはらしてあった。

やさしい娘は、このように悩み苦しむ、ある日のこと、川に身をなげ死のうとさえた。大事にいたらなかったが、このこともあって、親は、このままにできないと、ふたりの若者を呼

んでいわれた。あなたかたは、どちらも立派なかたじゃ。そのおふたりが、むすめを嫁にと熱心についてくださるのは、ほんとうにうれいことじゃが、娘はひとり。どちらのかたに、もらっていただくか、わしらは迷っておる。また、娘も、どちらのかたも好いておる。そこで、考えたすえのことじゃが、おふたりの、弓の腕前で決めたいと思っておる。

あの光って見える生田川に、水鳥が浮かんでおるが、早く射止めたかたに、娘を嫁がせたい。それを聞いた二人の若者は、喜びいさんで家に帰っていった。どちらも弓の名人といわれるほどの腕前であったし、どうしても、娘を自分の嫁にしたかった。とうとう、弓くらべの日がきた。このうわさは広がって、生田川の川べりは、見物人であらうであった。

二人の若者は、りりしいいでたちで現れた。生田川の川原に、台がつくられ、娘を中に両親がすわり、いよいよ、嫁とりの弓くらべが行われる時がきた。



娘の胸は高なり、まっすぐ二人の若者を見ることさえできんかった。(これで、私の運命が決まる。どうか、ぶじに矢が決めてくれますように。)心の中で手を合わせておった。二人の若者は、同時に、キリ、キリと満月のように弓をふりしほった。

あたりはシーンとし、見物人は息をのんだ。父親の合図で、矢は、それぞれに水鳥めがけて、一直線にとんでいく。一本の矢は、時を同じくして、一羽の水鳥に命中した。

「あっー ああっ。」大きなためいきと、どよめきの声があがった。その時、娘は、すくと立ち上がり、ふらふらと川岸へと近づき、川の中をのぞきこんだと思ふと、身をひるがえし、川に飛びこんだ。「ドッポン!」

「あしやの民話」は、芦屋に語り伝えられていたお話を、三好美佐子先生をはじめ、民話を研究するグループの皆さんが収集整理して、やさしく民話の形に整えられ、平成十一年に発行されたものです。